



まずは心の成長に合わせた子育てから

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

子供の心の成長に合わせた子育て

これまで数多くの講演を聞いてきた私にとって、今でも心に残っているすばらしい講演は、九州大学医学部名誉教授の井口潔博士の子育てや教育のあり方についてのものであった。

それは、子供の人間としての成長、とりわけ心の成長に合わせて子育てや教育をしなければならないという点に焦点が当てられていた。

一知半解との批判を覚悟しつつ、簡単に紹介すると、

まず、生まれてから三歳までは、祖先から伝わってきた「人としての感性」を目覚めさせる時期。この時期は、絶対的愛情に包まれた環境が必要である。美しいものを見、きれいな音を聴き、やさしいものに触れて、それに感じる心を育てる。

次に、四歳から十歳までは、感性を体験する時期。この時期は、外部とのかかわりの中で感性の仕上げをする時期。また、躰の時期でもあり、衝動的な行動に対して「冷静」に注意をすることも大切。読み書き算盤のような「基本的」な「知性の準備」をする時期でもある。

さらに、十一歳から二十歳までは知性の仕上げの時期。また、人格形成の時期。自我の意識とともに反抗期が訪れ、やがて高次元の調和を見出していく。また自発的思考期に入り、知性の仕上げとして、判断力や批判力が培われる。感性と知性との調和を図りつつ、生き方の選択をする時期。

以上が、博士が講演にて子育てに関し述べられた部分の概要である。

このように医学の立場から適切な子育てのあり方を、一般のわれわれにも教授していただいたことは誠にありがたいことであった。

現実には望ましくない方向に

ところが、私は現代日本社会において、子供の心の成長を無視した誤った養育、誤った教育、テ

レビゲームなどの過剰な刺激等々好ましくない現象があまりにも多いように思う。

昨今の青少年の凶悪な犯罪や、若者の不幸な自殺などもこうした現象と無関係ではないような気がする。さらに言えば、これからの日本社会がどうなっていくのか、漠然とした不安を覚えるのもこのあたりに原因があるのではないかと。

特に、養育の点では、親（あるいはそれに代わる人）と子供の位置関係が、子供の心の成長に混乱を与えている面がある。

ともすれば子供の成長とは無関係に早期英才教育を押し付け、感性の健全な発達を阻害する。あるいは、独立心を養うべき時に、いつまでも子供の前に立ちどまり、自分の勝手な理想（正確に言えば欲望）に引っ張っていかうとする。結果として、自発的な人格形成を損なってしまう。

こうしたことが頻繁に見られるように感じる。その結果、精神的に不安定な青少年が数多く育ってくる。特に近年は少子化現象で子供が大切にされているようで、かえって不幸な扱いをされていると言ってもいい。

誤った養育を施された子供は自由な心を持たないまま、自分の本当の心を偽り、親に良く思われたい一心で仮面をかぶって大きくなっていく。その結果、自我が確立しない問題児になってしまう。

もっと段階を踏んで、急がずに子供の養育に努め、他との競争や、対外的な見栄で、間違いを起こす事がないようにしなければならない。子供の養育はその子にとっては一回限りの事だからである。

こう言うと、おそらく少なからず、「すでに誤った子育てをしてしまった」「今更どうすればいいのか」「やむを得ない事情があって、そうした養育ができなかった」との不安の声が出てくるであろう。

私は、この深刻な問題に明確な答えを持ってい

ないが、個々のケースで、子育てにおいて誤った点や、その時期が異なっており、症状もまちまちと思われるので、専門家に相談をしながら、少なくとも子供が「人」として成長するまでは、決して見放すことがないようにしなければならないと思う。この分野に関しての研究が進むこと、及び具体的な対処方法が確立されることを切に願っている一人である。最近の信じがたい凶悪な事件の背景に親子関係に問題があったと聞くにつけ、つくづくそう思う。

子育てと社会との関係

誤った子育てを受けた青少年が増えるということは、その個人一人の問題にとどまるものではない。

「悪貨は良貨を駆逐する」のたとえではないが、社会全体の正常な姿、もしくは日本的な良さを崩壊させてしまう恐れがある。感性と知性が調和した「人」として育てこなかった若者が社会に放出されると、異常行動や、きわめて利己的な行動が社会に不安や混乱をもたらす。その結果、社会に無用な緊張感を醸し出す。さらに日本社会を成り立たせている共同体意識も傷つけてしまう。

今日は、グローバリゼーションの時代で温かみのない、勝者敗者の競争社会になり勝ちで、ますますそうした傾向を助長しかねない。まさに子育ては社会全体の問題である。

また、誤った子育てを受けた人が、同じ過ちを自分の子供に繰り返してしまう傾向が指摘されている。誤りの再生産であり、不幸の拡大につながる恐れがある。最近、問題視されることが多くなった種々のハラスメントの原因も此処にあるといわれている。このことについては、よい著作がある。(安富 歩 著「複雑さを生きる」第二章)

社会を震撼させる事件が起こるたびに社会が悪いという論調があふれる傾向にあるが、そこからは有効な解決の手段がなかなか見えてこない。まずは、根本かつ身近にある子育ての問題から解きほぐしていかざるを得ない。

また、日本は古来、宗教的な特徴として、精神面での規範があまり強くない国であり、その点、子育てに際し、躰や、思いやりの精神を育む努力

が特に求められるのではないか。

教育の面でもいろいろな課題が指摘されているが、まずはその素地としての家庭における子育てをしっかりと行うことが先決である。

大数学者の岡潔先生も人の子の生い立ちを三つに大別して、子育てのあり方や教育のあり方を書かれているが(「情緒と創造」)、同様な危機感を持たれたからであろう。

社会の建て直しには時間がかかる

日本は天然資源にそれほど恵まれていない中、人的資源を頼りにしてきた。

江戸時代や明治時代に日本に触れた外国人が日本人の礼儀正しきや親切さ(特に女性の)に感心したことが、驚きをもって記述されている。(たとえばポンティング著「英国人写真家の見た明治日本」)

今日の繁栄はこれまでの「人にまつわる蓄積」があったからである。

日本社会には、今日でも日本人であるが故のすばらしさが数多く残っていると思うが、それが失われだすと速いかも知れない。

確かに、少子化の問題は大きいですが、近年、子供の学力のみならず、日本人全体の品格まで急速に劣化してきていると憂いている人も多い。

これまで頼りにしてきた人的資源が、子育てや教育の段階で損なわれることがあっては、日本の未来は暗いと言わざるを得ない。

拝金主義がはびこり、効率性のみを追求し、他方で責任を免れることに汲々とする風潮にあって、一挙に社会を建て直していくことは容易ではない。このままでは社会そのものが三流になりかねない。

子供の成長に合わせて一步一步ことを進めていくとすれば、二十年や三十年をかけて、より良い社会の建て直しを図っていく必要がある。

他人がやることを期待し、社会が悪いとか政治が云々、と言いつつのもではなく、多くの国民が「子供の心の成長に合わせた正しい子育て」を理解し、それを自らの責任で実践する必要があると思う。

このことは、翻って大人自身の姿勢を正すことに繋がるかも知れません。